2020年7月5日　司祭　越山　哲也
八戸聖ルカ教会

聖霊降臨後第5主日（特定9）　説教

「重荷を負う人は　わたしのもとに来なさい。」

〔旧約聖書〕	ｾﾞｶﾘﾔ書　9:9~12
〔使徒書〕	ﾛｰﾏの信徒への手紙　7:21～8:6
〔福音書〕	ﾏﾀｲによる福音書 11：25～30

主の平和が皆さんと共にありますように。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」

（ﾏﾀｲ 11:28）

皆さんは上記の御言葉を聞いたことがありますか。おそらく多くの方が知っている有名な箇所ではないかと思います。ﾎｯﾄする御言葉ですね。

原文（ギリシャ語）では「来なさい」が実は冒頭に来ています。複雑な世の中にあって、また私たちも思うようにならない複雑に絡み合った感情を抱いて生きている中でイエス様が「私のもとへ来なさい」と呼びかけておられます。とてもシンプルな招きの言葉ですが心に響きます。

聖餐式の参入は、「主イエスキリストよ、おいでください」と言葉ではじまります。これはとても大切な言葉で私たちは「神の国」の完成を待ち望んでいる、言い換えるならば「イエス様が再びこの世に来られること」を待ち望んでいるのです。

それを繰り返し繰り返し私たちは思い起こすのです。なぜならば私たちは忘れてしまうからです。イエス様から離れていってしまうからです。

そんなわたしたちにイエス様は「わたしのもとへ来なさい」と招き続けてくださっているのです。イエス様がなされたことを思い起こしてみましょう。漁師だったペテロたちに声をかけ弟子になって一緒に生きようと呼びかけてくださったこと、重い病気、孤独の中にある人を訪ねその病気を癒やしたこと、そしてその行為はすべてある方向へ彼らを導いていこうとするものでした。

ある方向とは「神の国」に他なりません。自己本位な思いではなくすべての人の人権が守られ、争いもないまことに平和な状態こそが「神の国」です。

そして、神の国はいまだ完成していませんが、着実に完成に向けて日々成長はしているのです。

イエス様はその神の国の完成のために一緒に歩んでいこうと呼びかけてくださっているのです。
コロナウイルスの猛威が私たちの社会を覆っています。九州の熊本では洪水が今起きています。疫病、災害の中にあるとそこに人間のすべてが明らかになります。自己本位な思い、叫び、恨み、悲しみ。そして必ずそのような中にあって、人間の良心、人と人が思いやり助け合う姿も現れます。

私自身、1995 年の阪神淡路大震災、2011 年の東日本大震災、昨年の度重なる台風による被害、そして今年のコロナウイルスの事を思うときに、すべて最初は「戸惑い」「躊躇」から始まりました。何をしたら良いか分からないのです。体が動かないのです。そんな時決まって、家族、また信徒の方、同僚の聖職のお働きを通して励まされ、そしてようやく動きだす自分の姿がありました。

今回もそうです。コロナで礼拝が休止されて何を今したら良いのか思いあぐねてしまいました。人と人が会う動きが制限されているなかで何をしたら良いのだろうかと。

そんな時に心に響いてきた御言葉が本日の福音書にある「わたしのもとに来なさい」でした。「そうだ、イエス様のもとに行こう」「イエス様から離れていかないように」出来る事をしようと思いました。それから主日のメッセージを可能な限り届けようと思いました。また、お電話をかける、お手紙を書くなど日頃はなかなか出来ないでいたとてもシンプルな事を行いました。

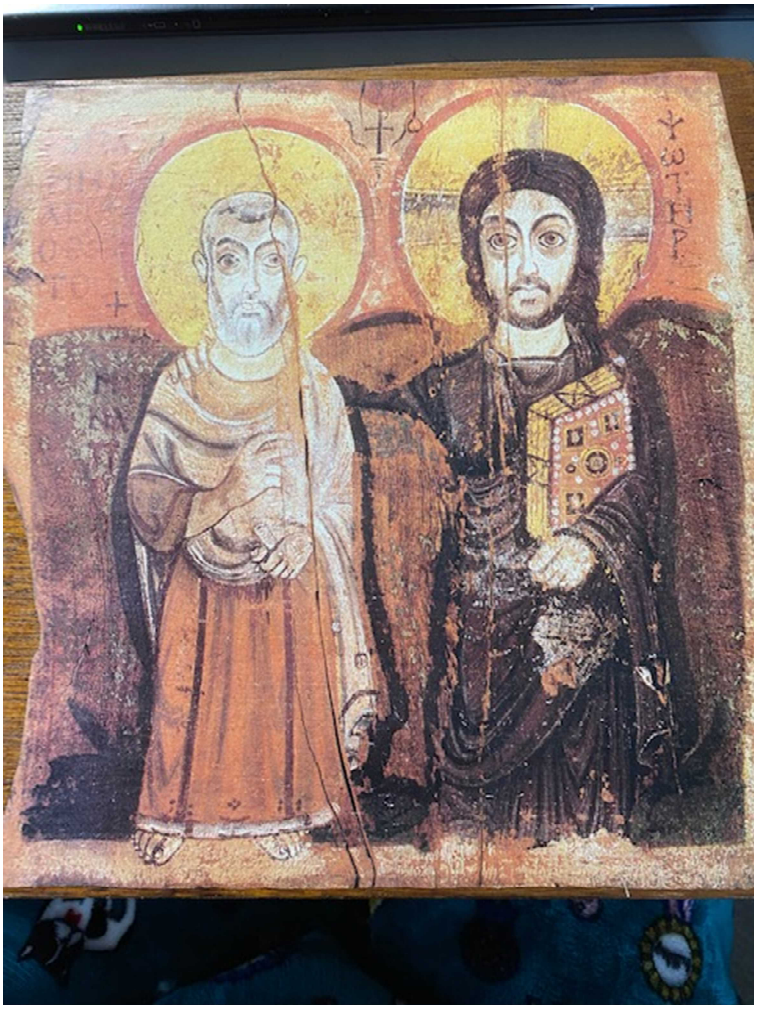
皆さんの声を聞いたり、お手紙のやりとりをすることによって自分自身が励まされ、活力が与えられていきました。人は本当に一人で生きているのではなく互いに助け合って生きていくのだと今、実感しています。

「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（ﾏﾀｲ 11:29^30）
「軛」（くびき）は、私は正直ｲﾒｰｼﾞが湧きません。調べてみると、2 等の牛をつなぐために用いられる道具とありました。なるほど、普段はあまり見かけることはほとんどありませんが、写真や映像を通して見たことがありました。ｲｴｽ様は「軛」を一緒に「私」と負って歩んでくださっています。
そして大切な事はｲｴｽ様が一人で重荷を「私」に代わって負って下さっているのではなく、一緒に負ってくださっている事です。私たちの現在の境遇はそんな簡単には変わりません。今この瞬間からもそれぞれの現場、悩み、葛藤を抱えて生きています。ｲｴｽ様を知ったから突然重荷が取り除かれるのではないのです。あくまでもそれを受け止めていくのは「私」なのです。その現実の重荷をｲｴｽ様は「一緒

に」負って、同じペースで歩いて下さるということです。「軛」はその事を教えてくれます。

下の絵は「砂漠の修道士」という絵（イコン）です。私がいつも大切にしているものです。

砂漠は人生の悩み、人の悪い思い、自我が明らかになる場所で、悪魔の誘惑に常にさらされている場所です。そして「孤独」「孤立」を感じる場所でもあります。

そんな砂漠で生きる修道士の横にイエスは一緒に立っています。

私は「軛」は身の周りにないのでイメージが湧きづらいのですが、この絵をそばに置いておくことによってイエス様がいつも横にいて一緒に重荷を背負って歩いてくださっていることを思い起こしています。イエス様は私たちの中におられます。私たちがコロナの中にあっても、災害の中にあっても助け合って生きていこうとするとき、またお互いに安否を気遣うときにイエス様の存在を身近に感じる事が出来ると思います。「わたしのもとにきなさい」と私たち一人一人を招いてくださっているシンプルな御言葉を忘れないで生きて参りたいと思います。